して争いを好まない日本人の生き方などを広く知らせて、日本の理解者日本の友人を増やすために、充実した活動を行っている日本文化セ の一流商社にも及ばず、殆どの重要な情報をアメリカに頼っていることは周知の事実である。また日本の実情や素晴しい文化や日本語、そ ンターは、今世界各国にくまなく置かれているだろうか。これも答えは否である。

懲りもなく唱えることには熱心だったが、非武装という至難きわまる生き方を補完し支える実効性をもつ、具体的な手は全く打ってこなか を自国の防衛手段の重要な柱として大変な力を入れているのに比べて、戦争反対、核武装反対、憲法改正絶対反対などの空疎な空念仏を性 このような例はいくらでも挙げることができるが、戦後の日本は、非武装どころか世界一の軍事大国であるアメリカですら、言語と情報

の闇夜に鉄砲となってしまう。そのときになって慌てて情報対策の強化に乗り出しても間に合わない。 れば、一体どこに敵対勢力がいて、その具体的な動きや装備がどの程度なものかを把握することも出来ないから、防衛行動はレーダーなし そして見逃してはいけないことは、たとえ強大な防衛戦力を持つようになっても、それに見合う世界規模での情報収集能力が伴わなけ

と言えるような具合になっていなければならない。 ないからである。しかしそのためにはアメリカも知らなかったような事実を、日本はとっくに知っていて、既に対策をチャンと建てていた はむしろこちらが先なのである。と言うのも言語と情報の力だけで、もしかしたら日本に対する非難や攻撃を巧くかわしおおせるかも知れ つまり日本は戦力を持つか持たないかにかかわらず、「国民の生命財産」を守るためには強い言語・情報力が絶対に必要であり、優先順位

言語・情報政策を確立すべきだと考えるのである。 ば、押しも押されぬ世界で最も豊かで魅力的な済技術超大国であるという、疑いのない事実をはっきりと見据えた上で、国家としての対外 以上述べた様々な理由によって、私はもう遅すぎるという感は拭えないけれど、いまこそ、誰が何と言おうとも現在の日本は外から見れ

成十七年二月十日脱稿)

人には元の姿、かつて歩んだ道に戻るしか選択肢がなくなってしまうのだ。

実は色々な点で世界の実際のあり方と、どんどんズレ始めていることをもっと重視すべきなのである。 条約(一六四八年)以来のものである。ところがこの「国家を以って国際社会の構成単位とする」という考え方、というかその有効性が、 主権国家には権利として認められている」とする現在も一般に国際的に認められている考えは、神聖ローマ帝国崩壊後のウエストファリア 言うまでもなく「国家主権は絶対で他国がこれを犯すことは許されないし、もし犯されたら究極的には武力を持って侵害者と戦うことが

り始めているときに、日本が折角大胆で非常識とも思われた実験として、非戦非武装国家という、旧来の国家の主権を本質的に大きく制限 は、全て国家が直接関与し、また管理し制御することのできる時代では最早なくなっているのである。このように世界のあり方自体が変わ の急増、そして国家どころか民族の範囲までも超える大規模なテロや宗教対立の拡大などによって、国際社会で起こる大きく重要な諸問題 易にせずに、生き残る道をもっと真剣に考え、色々な新しい対策や戦略を構築し実行してみるべきだと考えるのである。 するような憲法条項を掲げたのだから、それがどこまで可能かをもっと熱心に本腰を入れて追求すべきだと思う。再軍備という後戻りを安 簡単に言えば多国籍企業のめざましい増加、国家がその活動の全てを管理し掌握することの出来ない強力な団体(NGO,NPOなど)

きないように、日常の生活を整え、環境を良くし、無理な欲望を抑えるなど、地道で気の長い忍耐の要る「スロー」な生き方を実行する、 そのときは一応決着がつくが、殆どの場合後に後遺症が残り、これがまた新たな問題の種になる。これに反してそもそも病気(戦争)がお 姿を早くから提案しているわけである。戦争とは医学に例えていえば問題がおきた患部を、一気に力で切除してしまう限定的局所療法で、 予防医学的な対応こそ日本がとるべき道ではないだろうか。 その一つとして私は武器に代わるものとして言語そして情報を最大限に活用する、日本人のこれまでの歴史と常識になかった新しい国の

問題が起きる前に手を打っていなければならない。ところが現状は全く逆で、日本の外務省や大新聞社は、世界的な情報収集力の点で日本 を捨てた日本こそ既に世界中に立派な情報収集センターを置き、僅かでも日本に不利不穏な動きや言動があればいち早くこれを察知して、 良く知られていることだが鋭い牙のないウサギは、長い耳で素早く危険を察知して足早に危険から遠ざかって身を守る。それならば武器

ければ、様々な価値観世界観が対立し、利害の交錯する国際社会を生き抜くことはできないことを力説したのである。

営の一員として東側と対峙していたため、日本が一国として独自の立場で、直接ソ連や他の共産主義諸国の脅威に曝されることもなかった 米国との関係も冷戦のおかげで、経済や産業の面では、対立競合よりも米国は軍需で日本は民需という補完的分業の形が、全体としては保 のである。したがって国防問題は日本人にとっては緊急性のある身近で具体的なものとしては今ほど強く受け止められていなかった。また 同者を得ることができなかったと思っている。 語学教育もその観点から改革しなければ」とか「日本語を国連の公用語するよう政府は努力すべきだ」といった主張は、あまり積極的な賛 しかし当時の日本は繁栄のさなかであり国際的にはまだ東西両ブロックが冷戦の対決状態にあった。そして日本は米国の傘の下に西側陣 利害の衝突がそれほどには表面化していなかったのである。このような事情のためか、私の「言葉を武器として見直し、

は限定つきの再武装をして、自力で自分の国が守れる「並みの国家」を目指そうなどという、勇ましい声まで聞かれ始めている。 重なる米国主導の懲罰戦争と混迷の度を深め現在に至っている。日本をめぐる情勢もとみに騒がしさをまし、以前は殆ど無視されていた防 衛問題が活発に論議されるようになって、長い間タブー視されていた憲法改正に関しても各所で試案が出されるまでになってきた。一部で た民族単位の不満や矛盾が一気に噴出し、国際社会は至る所で分裂、紛争、民族浄化という形での大量虐殺、激しいテロの連続、そして度 ところがひとたびベルリンの壁が崩壊し冷戦が終結すると、世界は予想に反して平和になるどころか、それまで東西対立の影に隠れてい

るのかについての、具体的な戦略を提示してこなかったのは大きな怠慢であると思っている。新しい明確な目標が示されないから、多くの どうしたら日本人は世界にその例を見ない戦争放棄をうたった「平和憲法」を護持しながら、繁栄を極める大国日本を外圧から守って行け 日本の軍国化への後戻りを警戒し、再武装など論外であるとの立場を声高に主張し続けてきた、いわゆる革新政党や進歩的文化人たちが、 るほかないと思うが、果たして日本国民はその努力を十分にやってきただろうかについて大きな疑問をもっている。この点については特に、 策を真剣に検討した挙句、万策尽きた窮余の選択であるならば、座して死を待つわけにも行かない以上、止むを得ないものとして受け止め しかし私はこのような復古を目指す気運の高まりは、もしそれが、敗戦後の日本がこれまで既に非武装国家としてあらゆる生き残りの方

だからである。今国連加盟国は一九三を数えるまでになったが、その殆どはそこに住む国民の大部分が五百年はおろか、二、三百年遡って と動き動かされてきているのだ。 も今いるところにちゃんと居たぞと言える国は極めて少ないのである。世界の人々は一般の日本人が想像もできないほど、絶えずあちこち 日本人は千数百年の長きにわたって同じところで平和に暮らし続けることができたという、世界にも他に例のない恵まれた歴史を持つ民族

られても、これに本気で真剣に対処することをしないのである。しかし既に述べたように、情報宣伝力が全てに勝る現在、 こで言葉が何よりも大切となるわけだ。しかし日本人は自分の国の永遠の安全、永久存続に対する絶対ともいえる信頼感が意識下にあるた である。両者の違いを分かりやすく言えば、ファクトが「論より証拠」であるに対して、フィクションとは「証拠より論」なのである。そ どという不安は全く意識に上らないのである。つまり日本人にとっては日本がいつまでもあり続けるということは、殆ど客観的物理的に動 ょっとしたら自分の国がなくなるかもしれない、この島から追われてどこか他の土地に移らなくてはならないときが来るかもしれない」な ダーもなく護衛戦闘機もいない裸の戦艦では、日本がいくら巨大であっても世界の荒波を乗り切ることはできない。 めに、ユダヤ人のように言葉で自国を擁護し防衛する必要をまったく感じていない。だから国益を害する恐れのある言説を外国から浴びせ かしがたい事実つまりファクトなのであって、議論を戦わし論証することによって始めて確認されるもの、つまりフィクションではないの ところが日本人は少なくとも千五百年は日本人として、二度の元寇を除けばたいした外敵の恐怖もなくこの島に居続けている。だから「ひ 性能のいいレー

#### 十一、 むすび 武器としてのことば

の状態にあったとき、二度と武器を持って戦うことをしないと決意した日本が、人々の大変な努力と色々な幸運に恵まれて、短時日の間に 今からちょうど二十年前に私は『武器としてのことば』(新潮選書、一九八五年)を出版した。その中で私は敗戦によって全てを失い虚脱 誰も予想すらしなかった世界の経済技術超大国になってしまった以上、捨てた武器に代わるものとして、言葉を防衛の手段として見直さな

や番組をしばしば組んだりしている。最近全国的に起こった両社に対する非難や料金不払い、購読停止などの動きも、このような「国益」 からである。 を損なう報道番組の内容それ自体に向けられた怒りというよりは、むしろ不正経理問題とか取材を廻る不明朗さなどが国民の反発を買った か、またかといって本気で取り合う姿勢を見せない。それどころかNHKや朝日新聞などは、むしろ外国の言論を支持するかのような記事 虚実取り混ぜての反日色の濃い大合唱が、外国から何度繰り返されたかわからないが、政府もマスコミも、これに対して正式の反論はおろ 題は前に述べたような具合にあっけなく解決してしまった。これは一つの例に過ぎないが、実はこれまでも南京大虐殺、

思うと進歩的文化人のよくやる「日本も困ったもんですねえ」としたり顔をして、相手に迎合するかのどちらかである。 要するに「言いたければ言わせておけ、反論するだけ無駄だ、やつらには分かるはずがない、言われて減るものでもなし」と黙殺するか、 「うるさいから謝っておけよ、挨拶代わりに何かもって行ったら黙るんじゃないの」といった感覚で経済援助を申し出たりする。そうかと 私が見るところ、このように日本人は外国からの日本を非難攻撃する言論に対しては、一貫してこれに正面から立ち向かうことをしない。

のところで指摘した、日本人が心の深層に抱いている自国の絶対の安全についての不沈戦艦幻想を挙げたいと思う。 な日本人一般に見られるこの外国からの非難攻撃の言論に対する非常に消極的で受動的な受け止め方の最大の理由として、この論考の始め とに対して、直ちに日本政府が厳重抗議すべきだといった強い怒りの姿勢が見えないことが、大変奇異に思えるのである。 を公平客観的な立場から見る努力をしている者にとっては、このように自分たちの前元首がひどい侮辱を外国の公的機関から受けているこ 誤認、誇大な数字、意図的な歪曲などを指摘して、一様にこの番組の意図に戸惑いや不快感を示している。だが私のように可能な限り世界 の偏向脚本なので協力を断ったそうだが、雑誌記者から脚本内容の説明を受けた何人かの日本人識者や専門家は、みなそれぞれ重大な事実 マ『勝利した負け犬』を制作し近く公開の予定と報じた。このシナリオ作成には宮内庁が協力し、出演依頼のあった中曽根元首相はあまり 平成十七年二月十七日の『週刊新潮』は、英国国営放送であるBBCが、「昭和天皇」は人格が歪んだ「身体欠陥者」だという内容のドラ 私は以上のよう

ユダヤ民族が二千数百年もの間、至る所で迫害追放の憂き目に会い、世界各地をさまよい続ける悲運を味わったのとはまったく正反対に、

守るための強力な武器である」という私の主張の意味を具体的に示す好例だと考えるからである。 の是非を議論するためではなくて、ユダヤ人と日本側がそれぞれこの問題に対して示した反応が、「言語とは自分たちの属する集団 に追い込まれるという事件のあったことを、まだ記憶している人も少なくないと思う。私が今このことを持ち出したのは、この記事の内容

も過剰に見える反応を示すのである。 まう。だから彼らは世界中の言論に目を光らせ、ちょっとでも反ユダヤ、反イスラエルの言動があれば『マルコポーロ』の場合に見られた 論し「不心得者」を叩き潰さなければ、自分たちの正当性が揺らいでしまい、自分たちの存在がその分だけ危なく不安定なものになってし るのだということである。だから彼らの言説や主張を否定するものやそれに疑義を挟むものが出れば、たちどころに大声を上げてこれに反 ーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどについても同じく言えるとなって、世界は収拾のつかない大混乱に陥ってしまうわけだ。 ちのここはもともと私たちの土地だという要求におとなしく従って、すごすごともと来たところに帰って行かなければなくなる。それはオ 入してきて、数千万の原住民を殺戮した挙句、勝手に国を作って僅か三、四百年しか経っていないヨーロッパ系の人々などとは、原住民た 千年以上も他の民族が住み着いている土地を、自分たちのものとしてしまうことは、現在の国際法では認められないし一般の常識でも通用 んでいたということ、その場所は彼らだけが信じる神が彼らに与えたものだと彼らの聖典に記されているといったことを根拠にして、既に 念を捨てず、そのことを絶えず他者に向かって執拗に主張し続けることだということである。そもそも二千年以上も前に、あるところに住 放の憂き目に会ってきたユダヤ人にとって、自分を守り民族を滅亡から救う唯一の道は、自分たちこそ神に選ばれた正しい民族だという信 ように、もし出版社が即座に謝罪し適当な対応処置を取らなければ、世界規模の日本製品不買運動を起こすぞといった、日本人には余りに しない。こんなことが通るならば、もともとアジア系の多数の民族が何千年、いや何万年も住み続けていた南北アメリカ大陸に無理矢理侵 この場合明らかとなったことは、エジプト、バビロンの時代からつい先頃までの長い間、気の毒なことに世界の至る所で虐殺虐待され追 しかし私がここで注意を喚起したいことは、ユダヤ人が主張する正当性とは、彼らが正当だと言っているその言説の中にだけに根拠があ

ところがそれにたいして、日本の出版社は一言も反論や弁明を公開することなく、早々と相手に謝罪し要求を呑んでしまったらしく、問

#### 私は考えている。

する人は多いが、もう一度戦争する気があるのかとなれば、話はまったく別だとおもう。 この学生が平気な顔で「今度アメリカと戦うときは」と言ったのには肝を潰した。日本人でアメリカと本格的な戦争をもう一遍やって、こ 国と戦ったのだが、戦争に弱いイタリアが何かとドイツのお荷物になったということを彼は言ったわけだが、とにかくまだ若かった私は、 彼は「今度やるときは、イタリア抜きでやろうぜ」といったのである。第二次大戦でドイツは日本およびイタリアと三国同盟を結んで連合 の前の戦争の復讐をしたいと思っている人がいるだろうか。自動車や金融の分野などでは、アメリカを負かしただの負けただのと一喜一憂 たまたま出合った同じ敗戦国ドイツから来た留学生から次のように言われて、すぐには返事ができなかったことを今でもよく覚えている。 っかりやらなくては」と思うことが普通なのだ。現に私は日本がまだ連合軍による占領下にあった一九五〇年にアメリカに留学したとき、 もしこれが戦争なれしている民族ならば、あの敗戦をただ「あの時は運がなかったからさ」と諦めを持って受け止め、「この次はもっとし

らだと考えれば納得がいくのではないだろうか。 のことが長期にわたって実際に可能だった自分たちの体験に基づく、これまで述べたような極めて特殊な歴史文化的な感覚をもっているか 力や策動があったにせよ、とにかく憲法に明記したことは、人間の正しい生き方は他者と争わずに平和裡に暮らすことだと考え、しかもこ ったとはいえ、今後対外紛争を戦争という手段に訴えて解決することはしないという、世界初のいわゆる戦争放棄を、たとえアメリカの圧 このように日本人が、たった一度だけ経験した敗戦(もっとも古代における白村江の戦いも大敗北だったのだが)がいかに悲惨なものだ

#### 十、ファクトとフィクション

を呈する内容の記事をのせたため、国外のユダヤ人団体から猛烈な非難攻撃を浴び、そのため編集長が辞任したばかりか、雑誌自体も廃刊 数年前に『マルコポーロ』という雑誌が、第二次世界大戦中ドイツのナチ政府が行ったユダヤ人大量虐殺 (ホロコースト)

ぼさない鎖国」を続けることが許されなくなった開国後の、全体として僅か五十年足らずの期間でしかないのである。

明治維新の際に日本に与えられた選択は、それまで殆どのアジア・アフリカの国々が辿った道、つまり西洋諸国によって植民地か保護国、

すべてが戦い向きには出来ていないため、結局哀れな結末を迎えたというわけである。 分かる。これを分かりやすい比喩で言うならば、弱い他の動物を狩り立て捕食することによってのみ生きてきた、鋭い牙と強靭な体躯をも い歴史のほんの一時期、しかもそれが拡張主義的で攻撃的な欧米と直接に接触し競合するようになった近代に、戦争が集中していることが 東アジアにおいて多くの権益を手にしていたロシアや欧米諸国と衝突することになったのである。このようなわけで日本という国はその長 とに、これらの国々に対抗できる自らも西洋型の大国となることを目指す脱亜入欧の拡大路線を歩まざるを得なくなり、やがてこれが既に 者を選んだ日本は、そこで当時の世界を支配していた欧・米・露といった『文明国』にならって「富国強兵・殖産興業」のスローガンのも あるいは海外領土などにされることを甘受するのか、あるいは何としてでも独立を守りながら国として生き残る努力をするかであった。後 つ肉食獣の群れ、すなわち一九世紀末に文字通りの弱肉強食を地で行っていた西欧諸国の真ん中に、穏やかでそれまで争いとは無縁だった 一匹の草食獣が引きずり出され、この獣は何とか生き残るために、使い慣れぬ角や蹄を武器として一時は必死に暴れてはみたものの、所詮

たがって宿敵と見なす国が一つもないどころか、むしろ外国をユートピアとして美化し憧れる強い心的傾向が根強く見られるといったよう れが国際的に追い込まれた結果の、自立のためには止むを得なかったものであるにしても、何かしらの違和感を感じているのではないかと 感じる歴史的文化遺伝子とでも言うべきものがあるとしか思えないのである。だから戦争に狂奔した明治以後の自分の国の姿に、たとえそ な特殊性のために、日本人には「人間の生き方というものは平和が正常な状態なのであり、戦争とは異常な一時的変則状態にすぎない」と いるのは、実は日本民族の歴史が以上いろいろと見てきたように、建国以来対外的には、戦争や対立のない無風の期間が圧倒的に長く、し アメリカとの戦争に敗北して以来、多くの日本人が戦争はもう懲り懲りだ、二度とあのような無意味で悲惨な体験をしたくないと思って

だけで、明らかとなる明白な事実なのである。古代からの中国大陸はもちろんのこと、ヨーロッパ諸国もアメリカの歴史も、それぞれ建国 とは戦乱と戦乱の間の短い戦闘休止期間に過ぎなかったと言えるのだ。 以来戦争に継ぐ戦争の連続、 っても言い過ぎではないことが分かる。これらの人々にとって戦争(争い、つまり他者との緊張対立)とは人生の常態であって、平和な時 および止むことのない他民族の征服、そして近隣遠隔の地を問わずの植民地獲得戦争が、国としての常態とい

り平和な状態だったからなのである。 国の日本人にとって平和とは、言わば自然から与えられたそこにあるものなのだから、日本人には国際社会での平和というものが、一般に その分だけこちらが凹んで弱体化してしまうものだという感覚が欠如しているのである。それは先に述べた日本の歴史が対外的には文字诵 意思でかちとり支えるもの、絶えず確認する必要のあるもの、そして自分の権益を少しでも侵害されたときは、すかさず反撃に出なければ はこの動的な相互の押し合いが釣り合っている状態の呼び名に過ぎないことが全く分かっていない。だから日本人には平和とは自分たちの 者との一触即発の緊張状態によって支えられている、つまり力の均衡を前提とする平穏無事なのである。ところが外国と隔離されていた鳥 力が増すとかこちらに弱みが生まれるかして崩れれば、一挙に相手に押し込まれてしまう危険を孕んでいるものなのだ。だから平和とは他 の間での眼に見えない水面下での押し合いへし合いが、微妙に釣りあっている結果の無風状態なので、ちょっとでもこの平衡状態が相手の 見れば他の民族の場合でもこれは同じだ。しかしこれらの人々にとっての平和は、一見表面が穏やかに見えても、それは自分たちと他者と 日本人にとって平和とはどちらかと言えば世の中が穏やかで、何の問題も争いもない平穏無事の日々が続くことであるが、

世界大戦参加、シベリア出兵、満州事変、ノモンハン事変、そして日中戦争(支那事変)の予想外の拡大としての日米戦争(大東亜戦争) と、矢継ぎ早に対外戦争を行ったのは、何とも皮肉なことに西洋諸国の圧力で、それまでの二百五十余年にわたる「他国に一切の迷惑を及 二度にわたる元寇があったが、これは日本が一方的に被害を受けたものである。そして日本が日清戦争を手始めとして、日露戦争、第一次 および一五九七―人)の都合五年だけが、明治以前の千二六十年余りの間に日本が行った主体的な対外戦争のすべてなのであって、その間 日本の場合は最初の対外戦争である白村江の戦(六六二―三年)と、その約九百三十年後の豊臣秀吉による二度の朝鮮侵略(一五九二―三

とは現代外国語ではなくて、自分たちと利害関係がなくまた競争相手でもない古代ギリシャ・ローマの古典語だったのである。)

分野では依然として中国の独自性を主張していて、外国を見習って国内を改革改造しようという気運は見られない。 軍事技術そして貿易金融経済などの面では、広く外国から学ぶことが公然と行われるようになったが、しかし文化や政治、社会制度などの 念頭にあることは、外国をどう動かすか、どう扱うかという外向きの関心である。中国が改革開放政策を採るようになってからは、科学や を学ぶことで良くする必要など全く感じていなかったのは当然といえば当然である。つまりこの中国の場合もアメリカと同じく、主として ときに、堂々と自己弁護の論陣を張れるようになることが主目標なのであって、世界の中心(中華)だと自負している自分たちの国を、外国 そして中国人が外国語を学ぶ際は、それを使って自国の偉大さ、優秀さを相手に誇示宣伝し、自分たちが不当だと思う非難攻撃を受けた

### 九 戦争と平和に対する独特な感覚

てきた戦争、およびその休止期間としての平和に対する考え方、受け止め方が日本と諸外国では根本的に異なっていることである。 間の生物としての本質、潜在的能力は何時どこでも変わらないものと考えているが、しかし自然環境はもちろんのこと、歴史文化的な環境 思っている。その良い例がこの論考の趣旨に密接な関係を持つ、独立国家間での利害の対立衝突の究極的な解決法として国際的に認められ の違いなどによって、色々な人間集団(俗に言う民族など)は、現実としては様々な点で相互にかなりの相違をしめすことも事実であると ーラシアの諸民族から、半透膜によって隔離されていたという地政学的な環境の産物にすぎないということである。私は日本人に限らず人 ここで誤解を避けるため一言断っておく必要があるのは、前述の日本人がもつ外国観、外国人観は、日本民族が長い間強靭で攻撃的なユ

足らずなのだ。このことが世界の歴史から見てどれほど異常なものであるかは、特別詳しい歴史の知識などなくても世界史年表を一見する

になるが、この長い期間のうち、日本が外国と戦争を含む対立抗争状態にあったのは、数えてみれば分かることだが驚くなかれ僅か六十年 日本という国の歴史が大雑把に言って紀元六百年の第一回遣隋使派遣の頃に始まったとすれば、日本は現在まで約千四百年も続いたこと

の。『ことばの人間学』新潮社、一九七八年)。 もよいかもしれない(外国語教育の二つのタイプ。A 直接の人間的接触なしで情報の取れるもの。B 生きた外国人の存在が不可欠なも のかという視点、つまり他者にどう働きかけたらよいかを考える姿勢が全く欠如しているからである。相手がそもそも念頭にないといって りにすることができたと考えている。どこが独特なのかというと、日本人の外国語学習の場合は、習得した外国語を使って相手をどうする 地から、日本以外の国における外国語学習の力点の置き方と比べることによって、日本の場合がいかに独特なものであるかを初めて浮き彫 己宣伝であって、これに対し日本の外国語学習の顕著な特徴は自己改造、社会改革であることを指摘した。このような鳥瞰的な類型論の見 本のそれと比較したことがある。そこにおいて私はアメリカの外国語学習の特徴は他者攻撃、折伏制御であり、中国のそれは自己顕示、自 私は以前『日本人はなぜ英語ができないのか』(岩波新書、一九九九年)の中で、アメリカと中国における伝統的な外国語学習の態度を日

要するに自己啓発と日本の国を外国のように改革改造するという、どちらも完全に内向きな目標を目指すものであった。そこには日本は遅 手国に影響を与えようとか、ましてや世界をどうこうしたいなどという対外的な戦略などは、日本の伝統的な外国語学習とは無縁なものだ れている、自分たちは劣っているというはっきりした自覚、つまり否定的な自己認識が一貫して見られる。だから先生であり師匠である相 いう社会の改造改革、そして優秀な機械や製品を、自分たちの手で作るために必要な学問知識を手に入れるという実利的なことであった。 主義的な自己の啓発向上である。と同時に万事遅れている自分たちの社会を進歩発展させるために、「進んだ考え方」を外国から学び取ると い自分を、高邁幽玄な宗教文献や深遠な哲学、そして美しく格調の高い詩文などを外国語で読むことによって磨き高めること、つまり教養 日本人がこれまで外国語に期待したもの、いや今でも期待するものの第一は、いろいろと足りないところのある自分、不完全で欠点の多

という消極的で内向きなものでは全くない。(実はアメリカやヨーロッパで、この教養主義的な自己啓発の目的に向かって学ばれる「外国語」 変えてゆくのかといった、自己の正当性に対する自信に満ちた外向きの姿勢であって、外国の良さを知ることで至らぬ自分を高めようなど これに対してアメリカ型の攻撃、折伏、そして制御など、いずれも相手つまり外国をどう動かすか、更には世界をどのような姿のものに

と考えている。 しいことであり、このような外国観そして外国語観を、恵まれた歴史的環境の故に身につけることのできた日本人は、本当に幸せな民族だ

ても言えるし、またいわゆるG7も、日本以外の六ヶ国が全て西洋諸国であることからも明らかである。このような根強い相互不信を前提 とは国連の中心をなす国々がいまだに米英仏露と中国であり、安全保障理事会で拒否権をもっているのもこれらの国だけだということを見 ヨーロッパ(及びその出店であるアメリカ)から中国にかけてのユーラシアの国々が、今でも世界の主導権を握っているのである。このこ だが困ったことに互いに地続きであるがために絶えず異民族を排斥し、これと戦うことでしか生きる道のなかった気の毒な過去をもつ、

ある(日本国憲法の前文を参照、・・・平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。・・・)。 とする国々から成り立っている国際社会において、今や大国となってしまった日本が、自分たちのもつ柔な外国観、言語観が実は非常に異とする国々から成り立っている国際社会において、今や大国となってしまった日本が、 というアジアの一小国が、次々と接触した大文明からあらゆることを、文献解読に集中した語学教育のおかげで摂取して、世界の豊かな大 会も必要もなかったから無視されたにすぎない。あることが成功したか否かは所期の目的が達せられたかどうかで判断すべきであり、日本 発展をはかるという、海外情報の輸入消化であって、生きた人間としての外国人と直接交流して言葉を交わすことなどは、そもそもその機 での伝統的な日本の外国語教育の目的は、進んだ外国の学問や技術を文献(古くは漢書、下って洋書)を通して日本に取り入れ国内の進歩 などと言って批判する人がいるが、これはあたらない。日本が一九六○年代の後半に高度経済成長をとげて、念願の先進国入りを果たすま これを学び取ろうと努力し、そして成功したのである。これを現在の立場から見て会話が全くできないとか、国際交流にあまり役立たない 質例外的なものであることを自覚せずに、これらの筋金入りで百戦錬磨の国々と、天衣無縫の姿で付き合っているところに問題があるので へと成長することができたのだから、私は大成功だったとおもっている。 このようなわけで日本人はこれまで出合った優れた文明語を、自国の安定と存続に対する脅威として拒否するどころか、万策を尽くして

戦のショックこそ残ったけれども、アメリカに対する憎悪や復讐の気持ちは根が浅いだけに表面化しなかったのだと私は思う。 間には積年の恨みも憎しみの歴史もなかったのに、互いに馬鹿な戦争をしてしまったのだ。だから日本人の心には歴史上初めて味わった敗 そこでもしアメリカが日本の宿敵であったのなら、米国による日本の占領統治はあれほどには成功しなかったと思う。ところが日米両国の る外国の一つや二つがあるのに、日本には昔から宿敵と呼べる国が一度もなかったし今もないのである。例えばトルコやポーランドにとっ てロシアが宿敵であることは誰でも知っているし、ドイツとフランスもつい半世紀前までは、お互い何世紀もの間たがいに宿敵同士だった。 これまであまり指摘した人がいないと思うが、考えてみると大抵の国には「年来の宿敵」とみなされている憎らしくもあり恐ろしくもあ

など一部の地域を別にすれば、なくても別にどうと言うことのない小さな存在でしかない。 日本人の日常生活も外来語の氾濫という形で英語の影響を大幅に受けていることに比べると、一般のアメリカ人にとって日本語とはハワイ 題である言語の面で特に目立つ。現在の日本では英語を少しでも学んだ経験がまったくないという人は、もはや高齢者の一部になっていて、 影響は日本が受けた影響に比べて、問題にならないくらい小さいことは誰も否定できないと思う。そしてこのアンバランスはこの論文の主 そしてアメリカとの深く幅広い付き合いが始まってから、既に半世紀以上たったけれども、これまで日本が全体としてアメリカに与えた

### 八、外国語とは専ら自己を向上させ社会を発展させるための手段

ころか、一貫して美化賛美して取り入れるという、これまた世界にあまり例のない態度を示すのである。しかし私はある意味でこれは素晴 れは一般にゼノフォビア〔xenophobia〕つまり外国人恐怖症として知られる、ユーラシア諸民族に強い外国観〕が欠如していることが明ら かとなったと思う。それだからこそ、その時々に接する相手の言語、つまり外国語をも、自国の言語を脅かすものとして嫌悪し排斥するど ならない危険で恐ろしいもの、警戒すべきものとみなすという、世界のいつどこでもの常識、いやむしろ本能的感覚とでもいうべきもの(こ 

べてが、実は敗戦後にアメリカの力、GHQ(占領軍総司令部)の指令によって、新しくもたらされたものだと言えるほど大きなものだっ とができない。なにしろいま大半の日本人が何ら特別の感慨も持たずに日々見聞きし、その中で生活している現在の日本社会の姿の殆どす したものだったかを身をもって体験した(そして既に国民の少数派となってしまっている)私の属する戦争世代の人間は、決して忘れるこ

たのである。

たのである。 想していなかったことであるため、初めは半信半疑の戸惑いを見せたが、やがて疑いが消えるにつれて、それは深い驚きへと変わって行っ ら喜び、進んで米軍の占領行為に協力を申し出るものが続出したのである。これには当のアメリカ占領軍司令部も、なにしろ彼らが全く予 領当初から全く見られなかった。それどころか多くの日本人は、アメリカの勝利をば自分たちを苦しめた軍国主義からの開放だとして心か に、この「憎き」征服者であり「残虐な」破壊者であるはずのアメリカ軍を憎んだり、これにあからさまな反抗を示したりすることが、占 れ、その上二度の非人道的な原爆攻撃の結果、想像を絶する多大の被害を蒙るという悲惨な経験までした日本人が、なんとも不思議なこと ところがこれほどの大影響を受けた日本人が、しかも戦場ではない国内で、東京を始めとする全国の都市の殆どを空爆によって焼き尽さ

うに崩壊したわけではなく、 政府の統治機能が残ったままで終戦を迎えたため、 酷い社会混乱が生じなかったことがあげられる。 いまこの ないロシア人を標的とした激しいテロに手を焼いていることなどを見れば、米国に負けたあとの日本人の示した征服者に対する態度が、い 然として遭遇している住民のしぶとい不服従や激しい抵抗、またロシアが分離独立を唱えるチェチェンや北オセチヤで、いつ止むとも知れ の日本占領が比較的平穏に行われた大きな理由の一つには、確かに日本の軍隊は無条件降伏したが、日本が国家としてはドイツの場合のよ かに世界の常識を超えたものであったかが理解できよう。 ような点を詳しく分析する必要はないが、ただアフガニスタンやイラクで実質的な戦闘がとっくに終わっているにもかかわらず、米軍が依 つもあったが、国民規模での強い反米感情の表出、執拗な抗米運動などは絶えて起こらなかったのである。このアメリカを主とする連合国 たしかに戦後の日本では、局所的な摩擦や、一部の政治的あるいはイデオロギー的な立場にたつ集団の、小規模な反米デモ行為などは幾

引きずり出された日本は、国としての独立を守り社会の進歩発展を成し遂げるために、広汎な国内の革新改革に乗り出す。そこで何よりも た日本の近代化に着手した。それと同時に苦しい財政状況にもかかわらず、人材をすぐって欧米各国に多数の留学生を送り、進んだ学問や まず大金を投じて、西洋諸国からかなりの数に上る「お雇い外国人」と呼ばれた技術者や学者教育者を招き、彼らの指導助言のもとで遅れ

技術を急いで学ばせたのである

度の美化理想化が生まれることになったのも、古代中国に対する場合とまったく同様であった。そこで、なんでも「アチラ風でなくっちゃ」 れたりした結果ではないからである。つまりこの場合でも幸運なことに外国文化を一方的に押し付けられずに、こちらの望みと必要に基づ が可能だったのは日本の近代化が、たとえ抗いがたい外圧のもとで進められたものであるにしても、それが外国に併合されたり植民地にさ という「西洋中毒」患者が続々と生まれ、知識人の間には西洋崇拝西洋心酔の風潮が高まってゆくのである。 く取捨選択ができたわけである。そしてこのフィルターを通す間接文化受容の結果、西洋諸国の何もかもが日本より優れていると考える過 そしてこのときも何を学ぶべきかの選択、どの改革を優先させるかの最終決定は、全て日本側の自主的な判断によることが出来た。これ

ニスム)を除けば、殆どと言っていいくらい受けていないことに留意しておきたい。 洋諸国の方は日本からの影響を、わずかにアールヌーボーや印象派の絵画などに見られた、散発的でごく小規模な日本趣味の流行(ジャポ を探すのが困難なほど、社会全体が近代化、つまり西洋化し徐々に大国となっていったのである。しかしこのときも、接触の相手である西 そしてこのいわゆる西洋文明との接触は対米戦争が始まるまでの約七十年間続き、日本はこの短い年月のうちに、もはや徳川時代の面影

## 七、第三のユートピア、アメリカ

は広義の西洋文明ではあっても大分性質の違うアメリカ文明であったが、この嵐がどれほど強いものであり、そしてその影響がいかに徹底 今から半世紀前の一九四五年に米国との戦争に敗れたとき、日本は異文明による三度目の大幅な国内改造の嵐に見舞われた。今度の相手

なことを押し付けられても拒否できない。また大陸と地続きであれは、それこそ否応なしに大量の異民族が流入してくるから、この場合で も異文化の力で圧倒され、こちら側の取捨選択の自由は奪われてしまうことになる。 もし外国の文化文明が直接の征服によって日本に強制されたならば、良いもの欲しいものも入っては来るだろうが、同時に困ったもの嫌

れるこの心理を、地上ユートピア主義と名付けている。 全く生まれないで済む。だから外国を極度に美化理想化できたのである。私は日本人が抱く、外国をこの世の楽園、理想郷と思い込んで憧 と好みで選ばれているから、外国の嫌なところ、悪いもの困ったところは一切目に入らず、そのため相手に反発したり憎んだりする気持が あれこれと欲しいものだけを漁ることのできる、素晴しい宝の山積みされた宝物殿だと思い込むことが許された、例外的に幸福な民族だと いうことができよう。何しろ外国から直接酷い目にあわされることもなく、そしてもたらされるものといえば、それはすべてこちらの必要 このような否定的で破壊的な経験をせずに済んだ日本人の外国体験を比喩的に言えば、日本人は外国というものを、こちらから出向いて、

である。したがって「地上のユートピア」という言葉は矛盾を含む概念なのだが、外国の怖さ酷さを半透膜のおかげで経験せずに済んだ日 ものが来たためしがない」という諺をもつアラブ人には全く理解出来ないものと言える。 本人にだけは、それがいつも海の彼方にある特定の外国という形で存在し続けたからである。このような外国観は「海の向こうからは良い 元来ユートピアとはそのギリシャ語の語源が示すように「どこにもない場所」、つまり天国でならいざ知らず地上にはあり得ないものなの

## 六、 ヨーロッパという第二のユートピア

外国文化の選択的受容は明治に始まる西洋諸国との接触の場合にも繰返された。欧米列強の圧力によって鎖国の殼を破られ、広い世界に

文明を作ることが出来たのは、日本と大陸を隔てる海の性質が日本にとってまことに都合の良いものだったからである。 らということが大きい。もちろん島国であったというだけでは全てを説明できないことは、同じく大陸から切り離されている島国のイギリ 特の言語観、日本語観をもよく説明できるものと考えている。その結論を非常に簡単に言えば、日本が大陸と地続きではない島国だったか スが、独自の文明を形成せずヨーロッパ文明の一構成員に止まっていることからも明らかであろう。小さな島国でありながら日本が独自の この結論は私の年来の主張と合致するものであるが、それに至る私の分析と解釈は次のようなものであり、それによって日本人の持つ独

使もたびたび難破して使命を果たせなかったし、二度にわたる元の日本進寇も失敗に終わったわけである。 したがってこのような海を天候の予測がつきにくかった時代に、昔の船で行き来することは至難の業であって、だから日本からの遺隋遣唐 る対馬をはさむ東西両水道の合計は約百キロもあり、しかも海流が強く海が荒い。また東支那海を船で渡るとなれば距離は何倍にもなる。 はヨーロッパ文明の一部でしかないことになった。これに反してユーラシア大陸と日本との距離は最も短い対馬海峡においても、 示すように大陸から何度となく、様々な文化や言語をもったいろいろな民族が侵入したため、イギリスの文明はその結果として、基本的に イギリスと大陸を分かつドーバー海峡は幅が僅か四十キロしかなく、海が平穏の時には女性でも泳いで渡ることが出来る。そこで歴史が

ら、それを基にして遅れた日本をあらゆる面で改革改造し、国内を発展させることが出来たのである。 ことは難しいが、時たま運がよければ日本の遣隋遣唐使の船が、こちらにはない大陸の進んだ文物、優れた技術などをもたらしてくれるか 過できない半透膜の役を果たしたと言ってきたのはこの意味である。要するに、大陸からの計画的な侵略や異民族の大集団が渡来してくる を自由選択できたという、世界の歴史に例のない恵まれた立場に置かれていたのである。私が大陸と日本を隔てる海が、特定のものしか通 本にとって困るものは、取り入れずまた影響もうけないで済むという、強大な中華文明を自分の好みでつまみ食い、つまり良いところだけ このように随意気儘な航行を許さなかった海のおかげで、日本は長い間こちらの欲しいものだけを大陸から取り入れ、

的に受けただけであって、日本の文化文明が相手には殆ど影響を与えてはいないことが分かるのである。当時の日本人の中に、こちらが日 本語によって中国に何かしらの影響をあたえようなどと考えた人が一人でもいただろうか。私はこのような接触形態は、多くの人がなんと なく思っている文化交流ではなくて、実態は向こうからこちらへの文化直流に過ぎないと考えている。

響を大文明に残したうえで消えていくことが知られている。たとえば近世において中国大陸では明国が満州族によって倒され清国が誕生し た。辺境の騎馬民族であった満州人は武力こそ強かったが文明度においては漢民族に比肩するものではなかったため、彼らの文化はやがて のである。だがなぜか劣等でしかも弱小な日本は古代中国に吸収されなかった。また吸収された弱小民族の文化は、しばしばそれなりの影 歴史上小さな文明と大文明が接触した例は数多く知られているが、殆どの場合弱くて小さな方が強力な文明に吸収され消滅してしまうも

日本が吸収もされず、さりとて相手に何らの見るべき痕跡も残さなかったのはどうしてだろうか。 収もされなかったが、同時に小さな文明である日本の影響は強い漢文明のどこにも見られなかった。このように広汎な影響を受けた小さな ような様々な影響を漢文明に残したのである。ところが日本と中国の場合は千数百年もの長い接触があったにもかかわらず、弱い日本は吸 漢文明に吸収され埋没してゆくが、それでも辮髪や乗馬をこととする人々に特有の、裾に切れ目の入ったいわゆる「支那服」などに見られる。

### 四、半透膜効果による選択的文化受容

的な部分を構成するものと考え、これらを含む全体を一つの大きなまとまりとして、ヨーロッパやインドなどの他の大文明と対比させた。 しかし日本だけは、中華文明の強力な影響を大幅に受けたことが歴然としているにもかかわらず、その一部とは見なさずに、小さいながら 米国の歴史学者ハンチントンは『文明の衝突』などの著作の中で韓国、ベトナム、チベットなどの文明を、巨視的には中華文明圏の周辺

もそれ自体独自の完結した一個の文明としている。

り正しかったが、その条件がすっかり変わってしまった現在でも、まだ不沈だと思っているからである。事実これまでの日本は、対外的に 米軍機による集中攻撃にさらされ、あえなく撃沈された史実が良く示している。この点は後で再び詳しく取り上げることにする。 産物であり、そして二十世紀前半の世界で最強を誇った巨大戦艦「大和」が、味方航空機の援護を得られなかったために、三百数十機もの 国際化時代を生き抜くことは、いかに日本が巨大な戦艦であっても絶対に不可能である。このことは大艦巨砲主義という時代遅れの幻想の 言語を駆使して国を守る必要があまりなかった。しかし強力な言葉という護衛戦闘機群なしで、現在のように情報宣伝力が全てに優先する 幻想と呼んでいる。 なぜ幻想と呼ぶのか。それは日本が不沈戦艦だという確信は、日本が古来置かれてきた前述の環境条件が続いている限

## 海外からの情報摂取に特化した外国語学習

てさらに漢字から仮名という音節文字をも作りだし、これを漢字と混ぜて用いるようになった。その上もともと外国語である漢字に、 欠な手段として懸命に学んだだけでなく、同時に漢字という文字をうまく利用して自分たちの日本語を表記するという工夫も行った。そし いう形で日本語を対応させることによって、異言語のもつ高等で抽象的な概念を、曲りなりではあっても消化吸収し易くすることにも成功 て、日本語とは系統もタイプも全く異なる中国の言語を、ただ単に外交上の必要や、優れた文化や進んだ学問技術を取り入れるための不可 さて日本人が歴史上最初に真剣に取り組まなければならなかった外国語は古代中国語である。日本人は古代中国との接触を深めるにつれ

せることに終始していた。つまり古代中国と日本の接触とは大筋では日本が多大の影響(恩恵?)を、主として言葉(文献)を通して一方 ら取り入れたいものは文字であろうと文化であろうとすべて取り入れて、それを土着既存の言語や文化、そして各種の技術と巧みに融合さ しかしこのような古代中国と日本との接触の実態をよく見ると、それは当初から千数百年後の幕末にいたるまで、もっぱら日本が相手か

字制限も実施されるというかなり大きな言語改革が行われたが、これとても学者や専門家の間では激しい議論が交わされたものの、このこ とが戦後の混乱期であったこともあって、国民全体を巻き込む対立抗争にまで発展することはなかった。私はこのような言語問題にたいす こでも植民地経営に際しては、当然のこととして宗主国自身の言語を用いていたこともあってか、何語で統治を行うべきかについて論争ら 深刻な問題となることもなかった。さらにまた朝鮮や台湾を領有したときにも、日本が近代化のモデルとして選んだ西洋諸国が、世界のど る国民の無関心さは、以下に述べる日本という国の歴史的なあり方に深く根ざしていると考えている。 しきものは起こらなかった。そして大東亜戦争(太平洋戦争)直後の短時日の間に、表記が旧仮名遣いから新仮名遣いに変更され、同時に漢

# 日本語は自然の一部

といった、多くの民族が自分たちの言語に対して抱いたような不安は、日本人にとって無縁のものだった。そのため日本人は自分たちが使 かった。したがって日本語が外部からの力によって奪われるかもしれないという危機感や、ひょっとしたら日本語が消滅するのではないか 語を使う他民族と直接に接触し対決する機会が乏しく、その上国内にも日本語と対立拮抗するような、強い勢力をもった異言語が存在しな よく言われることだが、日本は同じく島国であるイギリスなどと違って、四方を囲んでいる海が容易には越えられないため、異なった言

けに極めて強いものであって、現在のように国際化が進み、以前とは比較にならないほど人々が色々な外国語に接触する機会が増えた時点 殆ど変っていない。

っている日本語を、まるで天然自然の一部であるかのように感じてきたのである。この感覚は千数百年もの歴史の中で育まれて来たものだ

る。この「自分たちの言語、そして国が絶対に無くなるようなことはない」という日本人が今でも抱いている無意識の確信を、私は不沈戦艦 そして日本人は言語だけでなく実は日本という国の存在にたいしても、同様の安心感を意識下の深いところで感じていると私は思ってい

はじめに

努力をすべきだという主張である に見られる対立紛争の沈静化にも寄与できる最良の手段でもある」ことを、国民も政府も改めて認識し、その目的を達成するための最善の 葉をとおして日本の良さ誇るべき点を海外に積極的に広く知らせることは、日本の国際的地位の安定的確立に役立つだけでなく、いま世界 なものとして位置づけ、それをいかに用いるべきかの考察である。その内容を具体的に、しかも簡単に言うならば、これまでわれわれ日本 人に甚だしく希薄であった考え方、すなわち「言語というものは、対外関係では武力に等しい力をもつ防衛手段であり」、さらにまた、「言 ここで私が取り上げる「言語政策の目的と課題」とは、日本という国が国家の政策として、これからの対外関係において言語をどのよう

語問題で国として苦悩した経験がないことにあると私は考えている。 の言語問題に無関心であった国はない。そしてこの無関心は今もって続いているが、その原因の大半は日本が諸外国に比べて、いわゆる言 しかし調べてみれば直ぐ分かることだが、現在大国として世界的な影響力を持っている国々のなかで、日本ほどこれまで国民が国内国外

するような政治問題にはならなかった。そして多くの国に見られたような、教育の現場でどの言語を教育言語として選ぶかといったことが もちろん明治以後日本の国内にも言文一致運動や標準語創出といった言語問題が全く存在しなかったわけではないが、それは国論を二分

孝夫